

再び…… 小沢昭一的小ころ

口演 小沢昭一

筋書 津瀬 宏



旅する心、出張先の心、街の灯の心
フリフリパンティの心、雄琴のお姐さんの心
偉くないお父さんの心、いじらしい男のまごころ
マジメに生きる巷のかたがたに再び捧げる

《驚異の長寿番組としてTBSラジオ系 絶賛放送中》

再び 小沢昭一的ころ



芸術生活社

再び小沢昭一のころ

定価九八〇円

昭和五十年八月三十日初版発行
昭和五十八年四月二十日九版発行

著者 小沢 昭一
津 瀬 宏

発行者 岩 下 義 治

印刷所 幸 進 社 印 刷

製本所 ナ シ ヨ ナ ル 製 本

発行所 株式会社芸術生活社

東京都渋谷区神山町一六番一号

郵便番号 一五〇

電話 〇三(四六九)一一五五

振替 東京 一一三〇六七〇

落丁・乱丁本はお取替えいたします

〈検印廃止〉

目次

● いじらしい真心を考える	7
● 領収書について考える	27
● 待つについて考える	47
● 南九州、贗新婚は今日もゆく	69
● 人が心を決める時を考える	89
● 下着について考える	109

● 出張について考える 139

● 残りものについて考える 161

● 男がそれをやめる時を考える 181

● 灯りについて考える 201

● 琵琶湖だ雄琴だがまん旅 219

● 泣き泣き許した最後の一線について考える 239

装帧插画
灘本唯人

再び
小沢昭一の
ところ

TBSラジオ制作「小沢昭一の小沢昭一的ころ」より

いじらしい真心を考える



さて「再び小沢昭一的ころ」の最初は、「いじらしい真心を考える」と銘打ちましての大考察でございますが、どうなるか分りません。田中前首相の御信条の方向にむかって前進し、修身のお話となるか、それともトルコ風呂の方向にむかうのか……えー、いくらなんでも修身にはならないでありますよ。それじゃ、トルコだ。トルコ風呂にも、真心はあるのでありますよ。むしろヒタヒタでございますよね。

よく、俺の顔を見たら料金をまけてくれただとか、ま、入ったとたんにあちらもスッポンポンになってくれたといつて、それがトルコ嬢の真心のように言いふらす説がございますけれども、そんなものは真心でもなんでもないのです。こういう精神がかの金権政治を生んだものではなからうかと、まことに憂慮に耐えない次第でございます。エー、それほどでもないけど、なにしろ真心といったって、これにいじらしいがつく真心でございますから、いきなりスッポンポンになって追いつく代物じゃないのであります。

「いじらしい」とは、心ざま、形の憐れで痛々しいさまを言う、ともの本にございまして、ま、いきなりペチャパイがスッポンポンになれば痛々しいだらうけど、トルコ嬢は、おおむね、ポインポインのムクムクだから、とてもいじらしくはないのであります。

「まごころ」とは誠の心でございます。偽りのない真実の心だね。こういう心は仲々見付からないのでありますよ。そこで、トルコ風呂のいじらしい真心のお話は……ひと息入れないとでもこれは話せません。

どこをどう工面いたしますのやら、お若い方が、あの高いトルコにいらっしゃるそうですね。ま、なかには部屋でトルコ嬢と二人っきりになったとたんに突如暴発なさいまして、そのままスゴスゴお帰りになるというような、とても元のとれない方もいらっしゃるそうでありますが、ま、おおむね、手がかからなくて時間が短くてすむと、トルコ嬢から若い方は大歓迎でございます。

えー、ま、若い人っていったって親がかりの学生ばかりじゃあございませんよ。遠くふるさとを離れての下宿暮らし、工員さんとか店員さん、それにサラリーマンなぞという方も大勢お見えになりまして、百戦錬磨のトルコ嬢だって、もとをたせば集団就職で、ふるさとを泣いて離れたことのある身でございます。そこはかとなく思いは通じるのでありますな。

こういう若い衆は、ハダカになって下さいと申しますと、決ってうしろを向くそうですね。エー、そのトルコ嬢に向かって後を向く。お父さんみたいにトルコ嬢の鼻先でこっちを向いて脱ぐのと違いまして若い方は恥じらいがあるのであります。

では何故そう恥じらうのか。彼等の下着は汚れているのね、それが恥ずかしいというのだそうですね。独身の男の下着というのは、これはババッチイもんでございます。

不肖私の独身時代のこのババッチイさ……ま、あの食事の方もいらっしゃいますからね、この時間は、エー、やめまされども、トルコ嬢は見ないふりをなさるそうですね。見て見ないのかもしれないけど、ま、見ないふりをなさる。それが仁義なんだと申します。ババッチイを見ない。パンツは見ません。

われわれですとはかせてくれますが、「まー、あんた、入りきれないじゃないの」なんていつて……。

えー、話は脇にそれましたが、あるところのあるトルコ嬢は、こういう若い人のパンツを帰りがけに新しいのと取り替えて上げると申しますね。

「ついでの時に寄ってよ、洗濯しとくから。ううん、入らなくていいンよ。入口で呼んでくれれば届けるから」

こう言つて新しいのを穿かせて帰すと申しますね。勿論彼女は入口で言われれば届けるつもりなのであります。しかし若者たちはコーヒー代ケチつても金を溜めて、彼女のもとにやってまいります。またパンツはドロガバでございまして、そこで彼女はまた新しいパンツを穿かせてやります。またコーヒー代ケチつてやってくる、また、ドロガバをかえてやる……かくて彼女は御繁盛の由でございしますが。

これがトルコのいじらしい真心なのだ。

昔々、赤線なんていうものが盛んにありました頃、一夜明けると雨なんていうことが間々ございしましたね。すると、一夜をともした彼女、いとも当然という面持で、自分の、赤い柄なにかつきました女持ちの洋傘を、見ず知らずのわれわれに貸してくれたものであります。

あれは小さいものでありますから、尻がぬれて往生したものであります。兵隊服の首にマフラーを巻きまして、女から借りた傘をさし、女から貰った電車賃を握りしめて雨の降つて

朝の街を、けだるい思いで歩きつつ、人の情といいますか、女性のやさしさといいますか、そういうものをじっとかみしめて、片袖が濡れていたものでございます。

ま、なかには剛の者がありまして、その洋傘を質屋にかつぎ込んだなんていう奴がおりましたが、あの頃の質屋はどんなものでも貸してくれたけども、あの洋傘じゃいくらにもならなかったんじゃないかと思うんですがね。どうせ返しに来てくれなくてもと、そう大したものじゃありません。しかしものじゃない。そのいじらしき真心が、われわれの心を打ったのでございます。

ま、こういう、男心に滲み込むような、いじらしい真心というのはどうも泥沼稼業など言われたナリワイの女性が多く示してくれたようにございます。

とてもあなた、マンションを親に買って貰って住むなんていう、過保護な女子大生なんからは全然感じられないものなのであります。全然あいつらは、他人はみんな自分に奉仕するものだと決めておりますから、いじらしい真心を献げるなんてことは信じられないのであります。だから殺されるんだよ、男に……。

それに第一あいつらは、いじらしい真心を献げにくい体つきをしているんだよ。背はこんなでしょ、胸なんか、ポポボンボンでしょ。尻なんかこオのくらいある。脚が魂消るのね、このくらいあるんだよね。おまけに扁平足で大足。あれでいじらしくなったら……誰だって気色悪くなるわ。

いじらしい真心とは、痛々しいほど憐れなまことの心でございます。戦後いちばん早く、われわれの前から姿を消したのがこのいじらしい心ではなかったか。それでは、いじらしい真心はもう今や皆無か。いやあります。夕べも私、そのいじらしい真心に一万五千円で触れたのでありますよ。

＊

とある老人ホームでのお話でございますが、こちらはご老人同志がこのホームにおいて結ばれますと、男組女組というような大部屋から、二人水入らずの個室が貰えるというイキなホームでございます。ま、ただいま残っている男組さんは断固俺は女は嫌いだという方ばかりでございます関係上、個室を持ちたいお婆さんたちは、勢い新しくこのホームに入っていられしやるお爺さんを狙うというわけなんだそうです。

ところがここに色男のお爺さんがあらわれたんだそうです。とたんにお婆さん全員の目の色がパッと変りまして、ここに一大お爺さん争奪戦が展開したと申しますね。

プレゼントの物量でゆこうというので、御飯のたんびにオカズのプレゼントをするお婆さんあり、「あたし実は一億円の貯金があるのよ」とささやくお婆さんあり、自信にあふれる肉体でダウンさせようと、矢鱈に横坐りして胸をチラチラ見せたりするお婆さんありで、ホームのなかは大騒ぎだったそうでありますが、三か月たってお爺さんがプロポーズしたお婆さんは、日頃目立たないまるで予想にも姿をあらわさなかったお婆さんだったんだそうです。

実はそのお婆さんもひそかに男前のそのお爺さんに憧れてたのであります。ありますが、自分にはなんにもない。だから、部屋の外に脱ぎ棄ててあるそのお爺さんのスリッパを揃えて、くるとツマ先を外にむけて置いておく。これをいつもいつもやっていた。これをひそかに見たお爺さん、そのお婆さんの心遣いに胸打たれて結婚を申し込んだというのであります。

いじらしい真心といいますものは、これは強烈な武器になるんだという。それはお父さんならみんな御存知だよねえ。みなさん、ことごとくあの日あの時だ、お母さんのいじらしい真心に心打たれて雄々しくも愚かにもお母さんとの結婚を決意したのよね。そうだろ。

それがいまのこの有様でございます。あの、哀しいまでにやさしく心ふるえる幸薄き少女は、いったいどこへいつてしまったのでありましょうか。この俺が支えてやらなかったら、そのままそこに崩折れてしまいうだった、あの少女はいったい全体、全体いったい、どうしたのでありましょうか。

その少女はいまではデブデブと太りかえり、どっかとわが家の中央に太陽のように尻を落ちつけて、

「亭主なんてえものはね、甘やかしたら絶対駄目よ。もう死なない程度にものをあてがって、時々、いい子いい子してやると結構嬉しがって働くものよ。あたしはね、世の中少し亭主を甘やかし過ぎているんじゃないかな」とこの頃思うのよ」

などと大声で喋っているのでございます。つまり、肺炎を病んだ自分の身を案じて、泣きな

がら冬のさなか、近くのお宮にお百度を踏みに行った優しい心遣いも、大学でノートを貸してやると、いつもお香をうっすらととき込んで返してくれた雅びな女心も、あれはみんなみんな武器なのでありまして、それに撃たれてあなたがその気になったとたんに、武器庫のなかにしまいこまれるものだったのであります。

そうしてどうなったか、それはお父さんがよく御存知です。いじらしい真心なんざどこへやら、あなたの背中にガッキと母さんはうち跨り、稼げ稼げの大号令。

あなた！ あれから、奥さんからいじらしい真心を示されたことがあるか。

答え「断固ない」。

ま、従いまして、世のお父さんたちは、いじらしい真心にはとてもとても弱いものなのでありますね。もう、まるで飢えちまっているのですからね。

よくあの街の酒場にまいますと、

「はい、これ誰々さんのグラス」

と、特定のグラスが出てくるお店がございます。もうこれだけでお父さんはゾクゾクするほど嬉しいのね。トルコ風呂でもそうですよ。「ハイこれあなたの歯ブラシ、お名前書いておいたの」もうゾクゾクゾク、ゾク、ゾクゾクするほど、これは嬉しいのね。自分のグラスがちゃんとこの店では保管されていて、大切そうにバーテン氏が磨いているではないかというところが嬉しいのであります。

いじらしい奴だ、うい奴だと思うのでありますね、イエ、なに、お父さんが見ていないとこ